

授業の工夫ポイントを共有することで指導改善を図り、目標の「対話力の伸長」を達成する

千葉県立上総高校は、2016年度から「対話力の伸長」を目標に掲げ、主体的・対話的で深い学びの視点からの指導改善を進めている。17年度には、授業の工夫ポイントを5つに整理して全校で共有。年2回の授業研究週間などを通して、指導改善のPDCAサイクルを回した。どの教科の授業においてもペアやグループでの学習、振り返りを実践してきた結果、生徒たちの対話力は着実に伸びてきている。

Plan

「対話力」を資質・能力の3つの柱に落とし込み、全校で共有

普通科と園芸科を有する千葉県立上総高校は、社会で活躍する生徒の育成に向け、生徒への育成を目指す資質・能力として「対話力の伸長」を掲げ、指導改善を進めている。同校では、卒業後、多くの生徒が地元就職することから、企業の採用面接はもちろん、就職後も、自分の考えや意見を自分の言葉で伝えることが必要になるためだ。主幹教諭で教務主任の糸川靖英先生はこう語る。「2016年度に着任した現校長

が、対話力重視の教育方針を打ち出しました。生徒の進路を考えると、それは最も必要な資質・能力であり、誰もが納得できる教育目標でした。以前の本校は、生徒指導に重点が置かれていましたが、生徒が落ち着いてきたこともあり、指導を次の段階に移そうと、全校で『対話力の伸長』を目指した指導改善を始めました」

16年度は、糸川先生を中心に指導改善の方向性を模索。まず、生徒に学習の見通しを持たせることが大切だと考え、全教科・科目で授業冒頭に学習課題を板書するようにするとともに、教科を超えた互見授業を行い、指導の工夫などを学び合った。

全校に指導改善の意識が浸透してきた17年度は、教師によって解釈が異なっていた「対話力」を具体的に定義した。校長や教頭、糸川先生、教務部所属の教師4人による授業研究チームで議論し、学校としての対話力を、「相手の伝えたいことを正しく理解し、自分の考えを明確に述べ、説明する力」と定義。次期学習指導要領における資質・能力の3つの柱に、その定義を落とし込んだ(図1)。そして、学習指導要領改訂の方向性の1つである「どのように学ぶか」の視点に立ち、主体的・対話的で深い学びを通して、「何ができるようになるか」対話力の伸長」を

図ることを目指した。

なお、同年度から千葉県総合教育センターによる「これからの時代に求められる資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントに関する研究」子どもたちの主体的・対話的で深い学びを通しての「研究協力校」となり、同センターの協力も得ることになった。

Do

協働学習や振り返りなどで授業に対話の場を設ける

指導改善の具現化に向け、授業研究チームは、主体的・対話的で深い

千葉県立上総高校

◎校訓は「誠実 進取 希望」。重点教育目標に「言語活動と体験活動を充実させ、生徒の対話力を伸ばす教育活動を展開する」などを掲げる。2年次にはインターンシップを実施。地域での清掃活動や地元の小生を招いた農業体験など、地域との交流にも力を入れる。

◎設立 1910（明治43）年

◎形態 全日制／普通科・園芸科／共学

◎生徒数 1学年約80人

◎2018年度進路実績（現役のみ）
4年制大は、清和、東京情報大、東京農業大、日本大に4人が合格。短大、専門学校進学14人。就職52人。

◎URL <https://www.chiba-c-ed.jp/kazusa-h/>



千葉県立上総高校
糸川靖英 いとかわ・やすひで
教職歴9年。同校に赴任して6年目。主幹教諭。教務主任。理科（化学）。



千葉県立上総高校教頭
池谷道雄 いけや・みちお
教職歴33年。同校に赴任して1年目。

学びを具体化するための授業の工夫ポイントとして、①学習内容の明確化、②問いの工夫、③教材・教具の工夫、④指導方法の工夫、⑤内容の振り返りの5つを提示(図2)。チームのメンバーが各教科会に参加してその内容を説明し、メンバーの実践などを基に具体的な方法も示した。

糸川先生は、教務主任として率先して指導改善に努めた。担当する3

図1 上総高校が設定した資質・能力



* 学校資料を基に編集部で作成

図2 具体的な取り組み

- 1 学習内容の明確化**
本時の目標を提示し、生徒が何を学習しているのかを明確にする
- 2 問いの工夫**
生徒が興味・関心を持つ問かけ、思考・表現する問かけ
- 3 教材・教具の工夫**
視覚に訴える教材など
- 4 指導方法の工夫**
ペア学習、グループ学習、先生役生徒の活用など
- 5 内容の振り返り**
発表、生徒相互確認、振り返りシートの活用など

* 学校資料を基に編集部で作成

年生の化学の授業では、授業の流れを、①学び直し、②説明、③まとめ、④問題演習、⑤振り返りとして固定。授業冒頭には本時の目標を示し、生徒が目標と流れの両方の見通しを持って学べるようにした。そして、対話力を伸ばすために他者と話す場面をつくろうと、協働学習と振り返りを重視。問題演習では、生徒にとって難しい問題を出し、グループで取り組ませることを1年間継続した。

「グループで話し合わせると、私語が増えるのではないかという不安もありましたが、やってみないと始まりません。うまくいかない場面もありましたが、諦めずに毎回、協働学習を行いました」（糸川先生）

振り返りでは、「今日分かったこと」「今日学習したことが、社会で生かされている場面は？」の2点を書かせた。そして、生徒が提出した時に一読し、必ず声をかけた。例え

ば、単語しか書いていない生徒には、「これはどういう意味なの？」と問かけ、自分の言葉で述べさせた。

3学期には、糸川先生が最初に手順を説明すると、後は生徒が自分たちだけで話し合いながら学習を進める場面が見られるようになった。

「進路決定後の3年生の授業では、例年生徒の集中力が途切れがちでしたが、その年の生徒たちが主体的・自立的に取り組む姿に、指導の手応

えを感じました。全校で方向性を共有したからこそ、授業だけでなく、学級経営でも対話力が重視され、落ち着いた学級づくりができたことが基盤にあると思います」（糸川先生）

振り返りでも、当初は糸川先生からの問いかけを嫌がった生徒もいたが、だんだん話すことに抵抗感がなくなつたと言う。

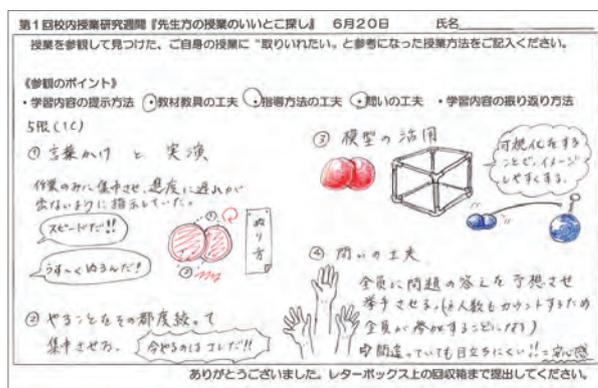
そうした生徒の変化は、生徒自身が学びのPDCAサイクルを回した結果だろう。例えば、生徒が書いた書類の文字が読みにくければ、「履歴書にもそんな字を書くの？」と提出時にすぐ指摘したり、授業中、根拠を示した発言をした時は、「面接でも、今のように根拠を示して言うといいね」と褒めたりしている。その場で生徒が自身の行動を振り返れるようにし、授業での学びが就職につながることを認識させている。

Check

授業改善の定着度と生徒の学習意欲を調査

6月と11月には各1週間、教師の空き時間に担当教科を超えて授業を参観する「校内授業研究週間」を实

図3 校内授業研究週間「先生方の授業のいいとこ探し」



施した。授業者は、授業の工夫ポイント（P.9 図2）に沿って授業づくりをし、参観者もその視点で授業を見て、「自分の授業に取り入れたい」と思った方法を「先生方の授業のいいとこ探し」シートに記入し、授業研究チームに提出。チームが、参観者が挙げた「いいとこ」を授業の工夫ポイントごとにまとめ（図3）、全教師に配布して工夫の仕方を共有するとともに、教師自身や教科会での振り返りに活用してもらった。

校内授業研究週間で、生徒に対する各授業のアンケートも実施。「本時の目標が提示されている」「振り

返りが実施されている」など、質問項目を統一して、指導改善の状況を確認した。6月と11月の結果を比較すると、「1時間の流れが分かりやすい」という項目の肯定率が32ポイント上昇。また、11月のアンケートでは、「自分の考えや意見を述べたり説明したりすることによく取り組んだ」など、生徒の学習意欲も調査したところ、教え合いや対話に関する項目の肯定率が高かった（図4）。

「グループ学習を全教科が取り入れた成果が表れました。生徒も授業が変わってきていると実感し、一生懸命に取り組んでいることが分かり



ました」（糸川先生）

その流れをさらに推進しようと、12月、「教科として目標とする対話力」を各教科会で定義した。担当教科の授業で生徒が対話力を発揮している姿をイメージしてもらい、その姿を教科ごとにまとめ、それを目指した授業づくりをすることで授業改善がより図られることを期待した。

Action

アセスメントで対話力の定着を測り、指導改善に生かす

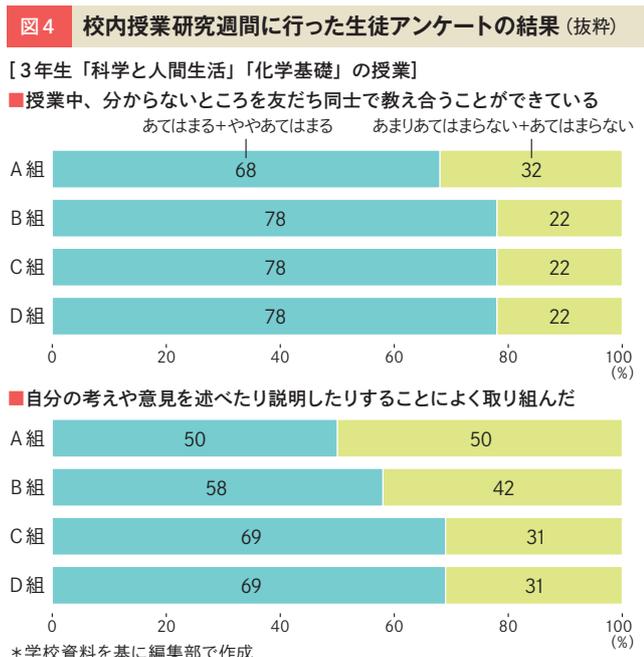
18年度に着任した池谷道雄（いけやみちお）教頭は、着任早々授業を見て、グループ学習が落ち着いて行われていることに指導改善の成果を感じたと語る。

「教職歴2年目の若手教師の授業では、勉強があまり得意ではない生徒もグループで話し合っ

て課題に取り組んでいました。なかなか主体的に学習に向かえない生徒も、みんなで取り組むことによって、学習姿勢が変わるのだと実感しました」

ただ、今年度は多くの教師が異動したため、授業研究チームが各教科の教科会に参加し、目標と授業の工夫ポイントの共有から始めた。

*1 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲の学び直し専用プリント教材。
*2 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。



「前年度にうまくいった方法が、今年度もうまくいくとは限りません。着任した先生方を含めて、全校で改めて指導改善の方向性を共有しました」(糸川先生)

授業づくりでは、学習内容の明確化と振り返りに焦点をあてた。前年度までの成果から、目標の立て方を「〇〇しよう」から「〇〇して、××を理解しよう」に変えた。

「習得だけで終わらず、活用までを目標としていることが、生徒に分かるようにしました」(糸川先生)

また、学び直しには数年前から

ネットの「マナトレ」(*1)を活用して取り組んでおり、学力の定着度を測定するため、ベネッセの「基礎力診断テスト」(*2)を導入することにした。「高校生のための学びの基礎診断」の運用開始に備えることも、ねらいの1つだ。

「このテストには、教科学力や進路意識とともに『自我同一性』(*3)を測る項目があり、社会度が高ければ『他人の意見を聞ける』、自我度が高ければ『自分の意見をはっきり言える』といったように、本校が育成を目指す対話力を測ることができる

ものでした。生徒の自我同一性の分布によって指導の方向性が明確になり、全教師で意識共有できると考え、全学年で年2回実施し、指導改善に生かすことにしました」(糸川先生)

5月に実施した「基礎力診断テスト」の結果を見ると、教科学力については、GTZ(*4)でD3だった生徒が各学年とも約6割いることが分かった。基礎学力の向上が課題であることを全校で共有すると、生徒に家庭学習習慣の定着を図ろうと宿題を課す教科も出てきた。また、「基礎力診断テスト」付属の事前学

習教材をどう活用するかも課題に上がり、県内の先進校の取り組みを参考に改善する予定だ。

自我同一性については、発達型や社会型の生徒が多いことから(図5)、今後の指導の方向性が見えてきた。

「他者の話を聞ける生徒が多いと分かり、今後重視すべきは、生徒が発言する機会を意図的につくることだと分かりました。課題は、途上型の生徒への指導です。社会性や自我の確立には自己肯定感も重要ですが、本校の生徒はなかなか自分に自信が持てません。教師が生徒にもっと声をかけ、先生は自分を見てくれていると、まずは安心感を持たせることが大切だと考えています」(池谷教頭)

外部講師による講演会では、講師に突然質問された3年生がしっかりと受け答えをするなど、授業以外の場面でも「対話力の伸長」が見られるようになった。

「我々が考える以上に速いスピードで社会は変化しており、生徒はその社会を生きていくことになりました。目の前の生徒に必要であれば、新しい指導を取り入れて、生徒に社会で必要となる資質・能力を育んでいきたいと思っています」(池谷教頭)

*3 精神分析学者エリック・エリクソンが提唱した考え方。「基礎力診断テスト」では、自分のあり方に確信を持ち、自分の判断で行動でき、自分を主張していくという「自我確立度」と、社会の中で自分の役割を自覚して引き受けようとする「社会性確立度」から「自我同一性」を捉えている。
*4 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。